

子どもの自立や成長を促す指導者の言葉かけ

The word of leaders to promote independence and growth of children

古賀朱莉*

要旨：音楽教育に携わる指導者は、演奏指導等において様々な言葉かけを行っている。言葉かけは演奏等の質向上だけではなく、演奏者の全般的・総合的な成長や人間形成にも大きく影響している。このことから、言葉かけの効果や意味を考察し、子どもの自立や成長を促す指導者の言葉かけの価値について明らかにしていきたい。

キーワード：指導者 言葉かけ 集団づくり 音楽 学級経営

1. テーマ設定の理由

ある小学校で参観した音楽の授業では、「金の糸が頭からでるように息を入れて」や「元気よくだけじゃなくて、優しく歌ってみて」といった言葉かけをしていた。レガートに吹いたり歌ったりすることを、児童が想像しやすく伝わりやすい言葉に変えて伝えていた。その先生が指導すれば、どの学年であっても子どもたちはみるみるうちに演奏や歌が上達していく。言葉かけの工夫は、児童の成長を直接的、間接的に支えていると感じた。

以降、教育実習や学校支援ボランティア、部活動等における様々な場面の中で、指導者が子どもに行う言葉かけに着目するようになった。私が13年間活動してきた吹奏楽・マーチングバンド部の活動においても、互いの

*奈良学園大学人間教育学部4年生（執筆当時）

言葉かけは不可欠である。指導者から児童生徒へ、児童生徒同士など、言葉が行きかうことによって活動は進んでいく。

同じ内容であっても、全ての人が同じ言い方をするわけではなく、いわばTPOに応じて言葉かけは異なっている。例えば、演奏表現としてクレッシェンドを伝えたい場合、「音を大きくして」という直接的な言葉使いではなく、「息を吸って息を楽器に送り込んで」といわばひねった言い方がなされる場合もある。中には、「腹筋を使って」など、クレッシェンドとのつながり方が直接的でない場合もある。伝えた人だけでなく、伝える相手や伝える場所、目的に応じて伝え方も変わる。また聞いた側も伝え方によって変化がみられる。

そこで本論では、音楽教育に携わる指導者が、指導場面においてどのような指導言を用いているのかを分析し、演奏技術等の向上や児童生徒の成長に与える価値について考察したい。

2. 音楽教育指導者の言葉かけの3分類

音楽教育の指導者が使う指導言語は、機能によって分類できる。一つ目は、bや#、スタッカートやアクセントなどの楽譜に書かれている音楽記号をいわば翻訳し、その意味を伝達するものである。(本論文では、「①音楽記号を翻訳するもの」とする。以下同様)二つ目は、曲のテーマや歌詞の意味につなげる伝えたいことを伝えなければならないことへの自覚を促すもの(「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」)である。三つ目は、音楽表現者としての心構えや姿勢、態度、チームワーク等への意識を強化し、パフォーマンスマインドを高めるもの(「③パフォーマンスマインドをかめるもの」)である。

音楽指導者の言葉かけについて、私が直接見聞きしたものに加えて、音楽指導場面が記述されている実践記録などから特徴的なものをリストアップし、上記の3分類による整理を試みた。集めた音楽指導者の言葉かけは、

合計181個であり、それらを分類した内訳は、「①音楽記号を翻訳するもの」93個、「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」38個、「③パフォーマンスマインドを高めるもの」47個となった。

2-1 分類結果とその特質

2-1-1 音楽記号の翻訳

「①音楽記号を翻訳するもの」とは、例えば、音楽記号のf(フォルテ)やp(ピアノ)の強弱記号を、「声や音のものさし」という言葉によって、声量や音量の基準が、どのくらいの大きさになるのかを、児童生徒に分かりやすく言い換えたものである。

「ものさし」以外の例としては、「階段を一段ずつ上がるように」などの言い方によって、クレッシェンドを階段でイメージさせるものや、「チョコレートが溶けるような音」のように、dolce(ドルチェ)の甘く柔らかにという意味をチョコレートの甘さと柔らかさを比喩として伝えたりすること等が挙げられる。

こうした言葉かけによって児童生徒は、音楽記号だけではイメージしにくい内容を、実感を伴ってとらえることができる。楽譜上の音楽記号からだけでは伝わりにくい内容にふさわしい表現方法が効果的に伝達される。「①音楽記号を翻訳するもの」では、比喩表現が多く使われているという特徴がある。

以下に、その他の「①音楽記号を翻訳するもの」に関する言葉かけの例を列挙する。(P103表1)

表1

言葉かけの例文	指導内容
金の糸が頭からパーッと出るように頭のとっぺんから出すイメージで	歌い始めが聞こえにくい場合や音の響きがない場合に、音の出し方を意識させる場合に使われる。

元気よく歌うだけでなく優しく歌ってみて。	力を入れて歌ったり、演奏したりしている時に、力を緩めさせる場合や力強さではなく、盛大さを求める場合に使われる。
ゆで卵を口に入れたように	口の中を開けて響きを出させたい場合に使われる。
いい匂いを嗅ぐように鼻から息を吸うに。	ブレスを意識させ、多く息を吸わせる場合に使われる。
・気球が上がっていくように ・階段を一段ずつ上るように	だんだん音量を大きくしたい場合に使われる。
・宝石のような音 ・ダイヤモンドのような音	はっきりした音にしたい場合に使われる。
・チョコレートが溶けるような音で ・やさしく犬をなでてあげるような気持ちで…。	ドルチェの音にしたい場合に使われる。
トゥートゥーとちゃんと下をつけているかな？	タンギングを意識させて吹かせたい場合に使われる。
・ちょっと音が高くなったのがわかるかな？ ・どうしようか、大きくしたくなる？それとも小さくしたくなる？ ・その次の「君は飛び立つ」のところは、どうしようか？ また滑らかに戻そうか？	「旅立ちの日に」の合唱で、強弱を考えさせたい場合に使われる。
ここまで息を出しましょう（息をリコーダーの先まで出すよう、手で示す。）	リコーダーを吹くときに、息の量や使い方を教える場合に使われる。
先生はベターって弾いてないよ。だから、ちょっとリズムが出てきた感じがするよね。それに乗って弾んだ感じにしようね。	楽譜の流れの変化に気づかせたい場合に使われる。
・ウキウキ、ルンルン弾きたいね。 ・飛び跳ねるくらい元気に…。 ・踊るように…。 ・100点を取った時の嬉しさのように…。	楽しく表現したい場合に使われる。
・涙がでそうになるね。 ・しっとり…。 ・歩けないほどの悲しさで…。	悲しい表現をしたい場合に使われる。

2-1-2 ②テーマや歌詞の意味を示唆するもの

「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」とは、楽曲の背景や歌詞などに込められた思いに気づかせるものである。楽譜のテーマや歌詞の意味を読み取ることは容易ではない。そのため、指導者が楽曲に込められた思いやイメージを考えさせる言葉かけが必要となる。

例として「聞いてほしい人を思い浮かべてください」と、聞き手を意識させた言葉かけ、「ここは深い青で歌ってください。」「声をどんな色にしますか。」といった曲のイメージを色で例えた言葉かけなどが相当する。

楽曲に表現されている景色のイメージを喚起させる言葉かけが多くみられる。子どもの想像力に働きかけ、自分なりにイメージや思いをもって歌うことや、演奏することに役立つ言葉かけである。

以下に、その他の「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」に関する言葉かけの例を列挙する。（P105表2）

表2

言葉かけ	指導内容
・ウキウキ、ルンルン弾きたいね。 ・飛び跳ねるくらい元気に…。 ・100点を取った時の嬉しさのように。 ・犬がクルクル舞いしているような気分…。 ・心は弾んでる？	楽しさを表現するような曲の場合に使われる。
大空いっぱい春の香りが流れるんですよ。そのことを君たちの声で表現してください。	卒業のお祝いのうたなどの歌詞の意味を考えさせる場合に使われる。
“かぎりなく/あおい”だよ。イメージは空の広がりだよ。	「旅立ちの日に」の歌詞の一部を示し、空の広がりをイメージさせる場合に使われる。
「いい合唱にしたい、すばらしい卒業式にしたいと思っている人？」	合唱の歌詞に込められている内容から、卒業式にたいする思いを考えさせる場合に使われる。

「聞いてくれた人の心の中に、人を大事にする気持ちを少しでも広げることができるといいですね。そのために、みなさんが、小さな勇気を持って「小さな勇気を」を歌ってくれるといいなと、先生は思っています。勇気を出して、いきましょう！」	「小さな勇気」という合唱曲の題名から、歌のテーマに合わせて「小さな勇気を持って歌うように」と促すことによって、感情を込めさせる場合に使われる。
「みんなで夢見る世界」って、どんな世界かな？	合奏指導（「ふるさと」）で、歌詞の意味から楽曲のイメージを拡げる場合に使われる。

2-1-3 ③パフォーマンスマインドを高めるもの

「③パフォーマンスマインドを高めるもの」とは、演奏者としての心構えや態度、歌唱や演奏する際の姿勢、音楽を体全体で表現するときの工夫、チームとしてのメッセージを強調するといった、表現に向かう意欲や心構えなどを調整する言葉かけのことである。演奏に向かう態度を意識させることによって、演奏者としての自覚が高まり、演奏する姿勢そのものも改善される。

例としては、「となりの人を連れて歌い出そう」「隣の人の声を聞こう」「ソプラノの後ろの音が聞こえますか」のように仲間を意識させるもの、「気持ちを入れる時は前を向いて」といった姿勢に関する言葉かけなどが挙げられる。

パフォーマンスマインドを意識させる言葉かけでは、表現意欲や態度に関わる言葉づかいが多用される。演奏や合唱を正確に表現するだけでなく、聴き手に対する伝え方や伝わり方、その効果を意識させるものである。

以下に、その他の「③パフォーマンスマインドを高めるもの」に関する言葉かけの例を列挙する。（P107表3）

表3

言葉かけ	指導内容
隣の人と息を吸ってるのを感じながら歌い始めよう。	隣の人を意識させる場合に使われる。
リコーダーでも気持ちを入れる時は前を向いてほしい。	下を向いて吹くのではなく、前を向いて吹かせる場合に使われる。
両足をゲンコツ2つ分ぐらい開けなさい。	安定する立ち方や見た目を合わせるために、両足の開き方を調整する場合に使われる。
大声大会ではないので、美しい声で歌いましょう。大きく美しい声を出した方が勝ちです。	聴き手を意識させ、心地よい表現への意識を強化する場合に使われる。
休符の間も演技です。	休符もパフォーマンスにとって重要な役割をはたしていることに気づかせる場合に使われる。
君たちが聞いていなくてお客さんが聞いてくれるわけないでしょう？	自分たちが出している音を聞くようにし、周りから見た音を意識させる場合に使われる。
教科書見ないで吹けますか。	「エーデルワイス」をリコーダーで奏で、楽譜どおりに吹けるようになった後に使われる。

3. 音楽教育指導者の言葉かけの意義や価値

言葉かけにおける「①音楽記号を翻訳するもの」「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」「③パフォーマンスマインドを高めるもの」という3分類は、それぞれに個別の機能や特徴を持っている。と同時に、これらは密接に関連し合っており、複合的に用いられることになる。

もちろん表現上のレベルからすれば、「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」や「③パフォーマンスマインドを高めるもの」は、「①音楽記号を翻訳するもの」に支えられているともいえる。いわば、「①音楽記号を翻訳するもの」は、表現における基礎やルールの部分に当たる。音楽のルールが分からなければ、音楽を演奏することそのものができなくなるし、

思いを込めて合唱や合奏することも難しくなる。

実際の指導場面を想定すれば、楽譜通りにまず吹けるように練習することから始めざるを得ない。楽譜通りに合唱や合奏ができるようになったら、次の段階として、歌詞の意味や声の出し方、息の使い方に対する指導が必要となる。基礎から応用とレベルを上げるように、スモールステップでの指導にふさわしい言葉かけを行うことが大切になる。

私がマーチングバンドで練習している時にも、指導者から指摘されたことがすぐにできるわけではない。指導者は、「①音楽記号を翻訳するもの」のレベルにとどまることなく、「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」や「③パフォーマンスマインドを高めるもの」に関するレベルを要求する。言われたことは頭で表現の質を高めるために、指導者には多様な言葉かけが求められる。

さらに、表現者は指導者からの言葉かけを、単純に受動的に受けとめるのではない。演奏場面の初期の段階では、音量やハーモニー、演奏姿勢のことに関する指摘が多く行われる。私の経験では、指導者からの言葉かけに触発され、自身の表現について何が指摘されているのか、その意味内容について考え始めることになる。言葉かけが、クレッシェンドに関するものであれば、ただ大きく演奏しようとするのではなく、息の使い方を工夫しようとする。音量をただ大きくするだけでは表現の質は変わらない。何年間も音楽を続けている私にとっては、音量を求められたときには何を意識すれば、より適切な音量になるのか、その音量によって何を表現すべきかを知っているため、私自身が判断し、工夫することができる。指導者の言葉かけは、単なる指示ではなく、演奏者に工夫や判断を促すところにその本質がある。

子どもたちに対する言葉かけも同様である。言葉かけによって、演奏者の曖昧なイメージをより明確化し、演奏者が自分なりにそれまでの経験を想起し、解釈を加えることによって、不十分な表現が改善される。子ども

たちの表現に向かう意欲を喚起しつつ、具体的な表現方法を意欲的・目的的に模索し、工夫させるように働きかけることが重要である。

指導者の言葉かけは、即時的に機能するとは限らない。ハーモニーに関する改善などは、意図的・継続的な練習を重ねる必要がある。指導者に指摘された箇所のハーモニーを構成する和音を調べ、その個所に関わっている楽器の演奏者のみで改善に向け練習を繰り返す。集まったメンバーで和音のどの音を担当しているかによって、ピッチを高めにとるのか、低めにとるのかが変わるため、それぞれ自分が高めにとるのか、低めにとるのかを理解する。その後、主音から五音、三音と音を重ねていく。そうした一連の練習においても、指導者からの言葉かけが継続される。指導者には、スモールステップを意識した言葉かけや、改善を継続させる言葉かけが求められる。

また、マーチングでは、音だけではなく体全体を駆使した表現も求められる。見た目、外見の目標がマーチングには必須となる。マーチングは人が点になり、その点と点を結んで線となって様々な形をつくり上げ、織りなしていく競技である。人が点となり線をつくることに加えて、足を曲げたり開いたりする動きもある。全体の練習では、歩き方の練習から始まる。足の曲げ方やつま先の上げ方、姿勢を部員全員で揃えるために行う。その際に、猫背やO脚、腕の角度など様々なところが指導者から指摘される。歩くときには体を大きく見せるための練習である。猫背やO脚は、日ごろの生活が出るため、マーチングの練習にも同じように猫背やO脚になりやすい。それを改善するために、言われたことを理解するだけでなく、鏡を見て、出来ている人と自分を見比べたり、自分自身で鏡を見て出来ていない場所を探したりすることで改善できる。他にも、足を曲げて歩くスタイルかまげて歩くスタイルか、チームによって違いはあるが、足を延ばすチームでは、足の付け根から足の先までの使い方を考えて動かさなければ正しい歩き方にならない。また、自分で出来ていないことが分からない場

合には、鏡を見ることはもちろん、他の仲間に見てもらい、良くなるためのアドバイスをもらう。自分が意識していること以外に、気をつけなければならない場所があることに気づくことができる。こうした一連の練習を支えるためには、指導者による「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」や「③パフォーマンスマインドを高めるもの」に関する言葉かけは不可欠である。

さらに、より良い表現の完成に向けては、「③パフォーマンスマインドを高めるもの」に関する言葉かけがより不可欠なものとなる。その場合においても、指導者からの言葉かけを受動的に受け入れるだけではなく、演奏者自信による解釈と相当する練習の工夫が求められる。自分たちの演奏や演技を動画撮影し、それを見返すなどの取り組みによって、より良い演奏の工夫を模索することもできる。動画を視聴する際の指導者からの言葉かけが、改善への取り組みを支援する。指導者による言葉かけには、指導者と演奏者による評価が内包されている。指導者側のねらいを演奏者が理解し、表現に反映されているのかを評価し続けることになる。言葉かけは、双方向に機能する必要がある。

4. 音楽教育指導者の言葉かけの汎用性

音楽教育指導者による言葉かけは、音楽指導の場面に限らず、より広く教育活動における指導者・教師による言葉かけとしてとらえることもできる。「①音楽記号を翻訳するもの」は、基礎・基本の指導における言葉かけである。「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」は、具体的な内容を深めるための言葉かけに相応する。「③パフォーマンスマインドを高めるもの」は、より高次の目標の実現を目指す言葉かけと読み替えることができよう。

教科学習における教師の指導言を概観してみたい。算数教科書の記述には、「この畑の広さは、東京ドーム20個分もあります」といった比喩的表

現がよく使われている。しかし、東京ドームではその広さがイメージしにくいと判断した教師が、東京ドームではなく、「例えば、学校の25mプールだったらいくつぐらいかな」と身近なものに置き換えて説明している実践記録があった。子どもたちにとって、その広さをとらえやすくする説明の工夫である。プールが、教室に置き換えられている例も見られた。音楽指導者の3分類に照らし合わせると、「①音楽記号を翻訳するもの」と同様の工夫である。

音楽指導に見られる同様の言い換えは、国語科における難語句の指導場面でも頻出する。ある実践記録では、「突拍子もない」を「普通の人には思いつかない、とっても変わったこと」と説明していた。さらにより納得できるように「例えば、どんな食べ物が好きですか?」という問いかけを行い、「ヤマダ食堂の三角物語定食…」といった現実離れした例を挙げていた。こうしたやり取りを通して、「突拍子もない」の持つ「とほうもないさま」「度はずれなこと」を子どもたちに理解させていた。日常生活では経験できないもの、とらえにくい事柄に関する言い換えは、国語学習に限らず様々な学習場面において不可欠な言葉かけである。

また、発表の声が小さい児童に対して、「音読の声で発表しなさい」という言葉かけによって、「より適切な大きさの声」を指導している事例や、聴くときの姿勢について、「心の芯をビシッとさせて聞きなさい」という言葉かけによって、ざわついて教室の雰囲気を緊張のあるものに変えている事例も見られた。感想やメモを取るときに、「鉛筆の音だけにして書きなさい」という言葉かけによって集中した取り組みを実現している事例も多くみられる。学習態度を調整することは、決してたやすいことではない。「大きな声で発表しなさい」「ちゃんと聞きなさい」「静かに書きなさい」では実現できない学習態度形成が、教師の工夫ある言葉かけによって実現している事例である。

さらに、「話し合い活動」において、「秘密会議にしなさい」や「よい話

し合いができるチームは笑顔です」といった言葉かけをしている例があった。「秘密会議にしなさい」と指示することによって、子どもたちの声の大きさをコントロールしている。この言葉かけによって、ざわつきが軽減され、お互いに身を乗り出すような姿勢で話し合いが行われるようになった。「秘密会議」によって、話し合い活動の質を転換させていた。「よい話し合いができるチームは笑顔です」も同様である。話し合いのキーワードとして「笑顔」という条件を提示する言葉かけによって、よい雰囲気の話し合いを実現していた。音楽指導者の分類に照らし合わせると、「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」や「③パフォーマンスマインドを高めるもの」に類する工夫であるといえよう。

以上は一例だが、教科学習に限らず、学級づくりなどにおいても、教師による適切な言葉かけが、ときどきの場面状況における教育効果に直結する。児童がうれしいと感じる言葉かけとして、「えらいね」「よくできたね」「すごいね」などの賞賛の言葉は有効である。成功場面では、「認める・ねぎらう」「ほめる・励ます」言葉かけが、失敗場面では、「自信を持たせ、立ち直りのきっかけを与える」「安心感を与える」言葉かけが、場面状況に応じて適切に行われる必要がある。

こうした言葉を、単にそのまま用いるのではなく、音楽指導者が行っている3分類「①音楽記号を翻訳するもの」「②テーマや歌詞の意味を示唆するもの」「③パフォーマンスマインドを高めるもの」を意識し、より適切に工夫することによって、さらに大きな教育効果が期待できる。

音楽指導者の言葉かけについては、合計180余りの指導言を収集し、分類整理することができた。3分類の観点については、言葉変えの内容価値や、活用シーンによるより先生な分析も必要となるだろう。本論をもとに、教室内外における指導言の収集・整理・分類とそれらの価値づけについて、さらに幅広く取り組んでいきたい。指導技術の向上において、言葉かけの工夫は不可欠である。

引用・参考文献

1. 学級づくりの教科書（株式会社さくら社、有田和正）
2. 授業がうまい教師のコミュニケーション術（学陽書房、菊池省三）
3. 授業を変えるコトバとワザ（くろしお出版、森篤嗣）
4. あたたかなクラスづくり-「ベース力」が子どもをつなぐ-（東洋館出版社、小林宏己ほか）
5. 教師の言葉かけと児童の感じ方の関連Ⅰ（日本教育心理学会 第42回総会発表論文集、安達紀子ほか）
6. 教師の言葉かけと児童の感じ方の関連Ⅱ（日本教育心理学会 第42回総会発表論文集、上野三千代ほか）
7. 教師の言葉かけと児童の感じ方の関連Ⅲ（日本教育心理学会 第42回総会発表論文集、河野久美子ほか）
8. 小学校低学年の歌唱指導における「どなり声」の解消法に関する考察-実践事例にみられる傾向について-（玉川大学芸術学部、奥田順也）
9. 児童に対する発声指導についての一考察-基本となる発声についての考え方とその指導法-（新潟中央短期大学、長川慶）
10. 発声指導法研究：姿勢と呼吸-若き合唱指導者のための提言-（長崎大学教育学部紀要・教科教育学、宮下茂）
11. 教師の言葉かけが児童の学習の自己効力感に与える影響（兵庫教育大学大学院、養父志乃）
12. 子どもの成長発達を促す言葉かけとは-教師の気づきを重視したふり返りを通して-（学校教育相談研究会議、小久保裕之ほか）
13. 生徒の学習意欲に及ぼす教師の言葉かけの影響（鳴門教育大学情報教育ジャーナル、吉川正剛、三宮真智子）
14. 子ども達の自己実現を目指した学級経営の在り方-「授業づくり」と「規範意識の育成」を通して-（立命館教職教育研究、伊藤陽一）